留学生センター設立経緯とその意義
—留学生教育における不可欠な役割—

林　文明・桜山一倉・高瀬利恵子・及川浩和
古川竜治・清水勝昭・吉川せつ・謝　珉

1．留学生受入れ経緯

本学では，1969年にタイの留学生２名を初めて受入れ，1984年には，JICA より外国人研修生を受入れた。日本の大学の中でも早い時期より留学生教育を行ってきた短期大学である。そして国の留学生受入政策の転換，日本自動車産業のアジアでの展開の中で，アジアを中心として，日本に留学し，日本の自動車工学を学びたいという希望を持つ外国人が増加してきた。そのような情勢の中，本学は，留学生の希望と産業界の要請を受ける形で，数多くの留学生を受け入れることとなった。

特に1998年からは中国の湖北汽車工業学院を第一の提携大学として留学生を受入れ，その後中国を中心に，マレーシア・韓国・イタリア・ベトナム・タイの大学や日本語学校と協定を結び，他にも台湾・スリランカ・ネパール・ミャンマー・インドネシア・パキスタン・ブラジル・バングラディッシュ等，14カ国以上にのぼる国や地域から留学生が学びに来るようになった。さらに，各国の大学の自動車工学科との学術交流や研修生受入れ，自動車工学科設立の協力，合同省エネカー製作・レース参加の依頼・提案等もあり，様々な形での交流が行われている。

そして2005年頃までは，常に50～100人程度の留学生が在籍していたが，その後，2006年度約100名，2007年度約170名，2008年度約270名と増加の度合いが増していった。大学での検討の結果，留学生数を予測すると，今後２～３年で400名を越すことが判明し，それは，本学において留学生への充実した教育とケアを実施できる受入可能数を超過すると判断した。留学生受入れ適正数を250名以下と考え，受入れの見直しをはかり，基準や体制を変更した。そして2009年度以降200名前後の留学生が本学に在籍している。以上のように，留学生受入れ経過を振り返ると，少数受入時期，多数受入時期，そして適正受入時期と，大きく３段階の留学生受入時期があったと考えられる。

そして44年に亘る本学の歴史の中で，数多くの外国人卒業生を輩出してきた。卒業生は日本企業で整備士となったり，自動車サービスマニュアルの翻訳版作成や国際部のスタッフとして活躍し，またある留学生は帰国して日系企業の現地指導スタッフとなるなど，自動車業界，国際社会に大いに貢献してきていると自負する。

2．留学生別科設立と国際自動車工学科設立

日本語が不充分な留学生が，自動車工学を学ぶということは，留学生が特に苦手とする漢字とカタカナの専門用語に非常に苦しむことになり，本学の目標である国家資格の２級自動車整備士を取得することは，相当な困難を伴い，中には挫折する留学生を生み出したことも事実である。

教員は，留学生が本科で自動車工学を学ぶ前に，日本の環境に慣れ，日本語を学び，自動車の若干の基礎知識を導入しておく必要性を痛感した。そこで，2004年に留学生別科設立準備委員会を立ち上げ，文部科学省に認可申請を行い，2005年に留学生別科設立の運びとなった。当初は20名の定員であったが，留学生の増加に伴い，定員を70名に変更し，年２回の入学時期を設け，在籍者数50～100名程度で運営を行い，留学生を自動車工学科に送り出すようになった。

さらに，母国の大学において自動車は学んだが日本語は不充分であったり，逆に日本の学校で日本語は学んだが，自動車は全く理解していないなど，多様な留学生がおり，また留学生の将来の進路も，母国での自動車会社設立や日系企業就職，4年制大学への編入等様々であるため，新たに国際自動車工学科を設立することとなった。2008年に準備委員会を設け，2009年に設立，早速留学生の受入れが始まった。本学科は，基本的に留学生を対象としているが，もちろん日本人学生も入学可能であり，国際社会に関心のある日本人学生からの問い合わせはあるが，現時点ではまだ入学者はいない。

この国際自動車工学科では，日本語と自動車工学を時間をかけて学ぶと同時に，アジア各国で活躍する社会人の育成を目標としており，現在の重要な課題である環境問題や，経営・異文化理解等も深められるよう，特色あるカリキュラムを組んでいる。また４年制大学との協定により，編入できる体制を整えており，短期大学士取得，学士取得，2級自動車整備士国家資格取得が可能である。

また2009年には，同時に，より高度な技術を学ぶ為のモータースポーツエンジニアリング学科（MSE 学科）も設立した。したがって現在，留学生は，3年制の国際自動車工学科を中心に，本来の２年制の自動車工学科，3年制の MSE 学科，そして準備コースである留学生別科に在籍し学んでいる。

3．留学生センター開設まで

本学で学ぶ留学生は，日本人学生とは異なる状況・課題があるため，本学が留学生を受け入れる為には，そのための措置や援助が必要となる。今まで，留学生課・国際交流センター等，名前や組織体制に変更があったものの，教職員一体となって対応を行ってきた。

しかし，留学生の抱える問題は，学習・生活・経済・ことば・住居等多方面に亘り，日本人と共通する問題もあれば，留学生ゆえの問題もあり，その対応体制には，どれも一長一短があって，常に改善の余地を残している。

ただし，留学生が集える場所が必要であることは本学の一致した認識であり，ようやく2008年度に国際交流センターを開設した。ハード面では，収容人数20名ほどの教室に，机・いすとパソコン１台を設置し，昼休みと夕方のみのセンター開放という極めて不充分な体制でのスタートとなった。しかし，上記の国際自動車工学科の設置前であり，留学生の日本語能力の不十分さの問題が露呈しており，センターにおいて日本語の補習を実施した。これらはこの時点でのセンターの大きな役割であった。また，日本語能力試験・日本留学試験の受付，願書一括購入等でも，日本語能力向上に貢献できたと思われる。

その年の主な活動としては，7月９・10・11日に，第１回国際交流ウィークとして数種目のスポーツ大会とパーティーを開催し，日本人学生と留学生，計215名が参加，初めての大きな学生同士の交流活動が実施できた。また留学生会設立に関し助言を行い，四川省地震被災者への募金活動・寮一斉大掃除等留学生会の活動を補助し，留学生が自主的な活動を行えるようになったことは，留学生の充実した学生生活にとって大きな意味を持つことになったであろう。

センター開放時間も徐々に長くし，1年間で述べ約500名の留学生がセンターを利用し，教員からのアドバイスや指導などを行い，センターも一歩を踏み出した状況であった。

しかし，国際交流という外部との交流・訪問団受入れや，研修生の受入れから，内部の長期留学生，短期留学生に関する事柄，さらに学生の留学派遣まで，多種多様な業務があり，留学生の集いの場所として機能させるには，不充分な体制にあったことは否めない。その実態を反省し，2009年度に実質的に意味のある留学生センターをスタートさせることとなった。

4．留学生センターの目的と改善

これまでの留学生受入実態，前身である国際交流センターの状況から，留学生センターの重要な役割は，留学生や周りの日本人学生･教員が集え，安心でき，交流を深められる“いやしの場”となることである。

言葉が通じず，文化が異なり，家族のいない異国に来た不安や懐疑心，疎外感，寂しさを少しでも取り除き，日本・日本人への理解を深め，なじむことができ，大学とアルバイトだけの単調な繰り返しによるむなしさや意欲減退を防ぎ，充実した学生生活を送れるようにすることが，留学生センターの果たすべき役割であり，それによって様々な問題を未然に防ぎ，勉学に真面目に取り組めるよう後方支援を行う場所であるとセンタースタッフは考えている。

そのため，まずハード面でも改善を行った。場所を２倍の広さに拡大し，勉強の為の机や，相談･くつろぎのためのソファーセット，自動車や日本についての理解を深めるDVDを見るための設備，資料を集めたり日本や母国の情報を知るためのPC，催事の際にお茶を飲むための備品などを設置した。さらに，日本語試験の情報や就職，他大学の情報誌，国際交流の雑誌，留学生新聞等を閲覧できるようにし，その他必要な情報を提供できるようにした。また日本や各国の文化がわかる小物を飾り，自動車の模型を並べ，壁には留学生の国の国旗や様々な行事，各国の写真等

を貼った。学生を初め，来訪者も写真をながめ，話題も広がり，また広報的にも留学生生活を知っていただくことが出来るようになった。

そして毎日９時から19時頃までセンターを開放し，ほぼすべての時間に教員が常駐するようにした。また教員がいなくても学生はいつでも来られるようにし，教員もわずかな時間でもセンターをのぞき学生に声をかけるようにした。

センター会議は毎週１回定例化し，活動の報告や計画を話し合うとともに，留学生の状況についても報告し，情報を共有化し，すべての教員が留学生の状況を認識した上で対応するようにしてきた。また必要があれば他部署等に報告し，学内の協力の下，ケアに当たってきた。

５．留学生センター活動報告

留学生センターでは上記の目的と体制の充実のもと，様々な活動を行ってきた。以下に2009年度と2010年度の主要な活動を列記する。

2009年度

４月27日　新入生歓迎会開催　約100名参加（写真１）
５月28日　国際交流サッカー大会開催（雨天中止）
５月29日～７月末（金曜日）　定期映画鑑賞会
７月12日　富加コーヒーサロン参加　　10名参加
７月18日　国際交流スポーツ大会開催　250名参加（写真２）
（この回より日本語学校生も招待する）
９月16日　留学生カラオケ大会　敬愛寮にて開催（写真３）
10月16日　イタリア留学生にお茶会　センターにて開催（写真４）
10月31日　富加ふれあい祭（37名参加予定インフルエンザのため中止）
11月７・８日　美濃加茂産業祭参加　10名参加（写真５）
11月26日　秋季新入生歓迎会開催　30名参加（写真６）
11月28日　岐阜県内留学生日本語弁論大会１名発表（７名書類応募）
11月28・29日　富加ホームステイ　スリランカ人２名・韓国人１名参加
１月31日　世界ぎふ祭り　坂祝町中央公民館にて開催　６名参加
２月４日　坂祝中学生12名来校，留学生との交流会　４名参加（写真７）
２月12日　新春国際交流会 カルタ取り／正月紹介　50名参加（写真８）
２月13日　留学生寮に卓球台設置（写真９）
３月９日　留学生とセンターのふれあいミーティング実施（写真10）
「NAC の良いところ・悪いところ」を発表　留学生16名　教員８名参加

写真 1

写真 2

写真 3

写真 4

写真 5

写真 6

写真 7

写真 8

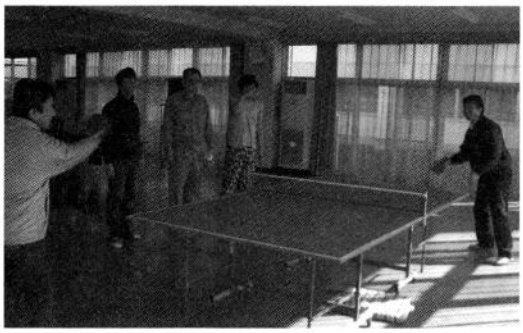

写真９

写真10

2010年度

４月27日　新入生歓迎会開催　約50名参加（写真11）

５月21～６月25日（金曜日）　留学生会主催バスケット交流会開催

５月27日　岐阜県国際交流センターより防災ガイド（４カ国語）配布

６月23日　国際交流サッカー大会（雨天のため中止）

７月16日　NAC 第１回日本語弁論大会開催 発表者７名 参加者30名（写真12）

10月15日　秋季新入生歓迎会開催　54名参加（写真13）

10月16日　富加道の駅わくわく祭り参加　留学生７名参加（民族衣装）

10月23・24日　大学祭留学生会３店舗出店（約40名参加）

10月30日　世界ふれあい広場参加　40名参加（写真14）

11月６日　岐阜県内留学生日本語弁論大会４名発表（原稿応募４名全員予選通過）（写真15）

11月12日　弁論大会発表者をたたえる会　10名参加

11月12～14日　犬山中学校文化交流企画　ホームステイ ３名参加（写真16）

11月13・14日　美濃加茂産業祭出展　約20名参加（写真17，18）

11月28日　広報部主催国際交流スポーツ大会参加

写真11

写真12

写真13

写真14

写真15

写真16

写真17

写真18

これ以外に年度内に，まず留学生支援の質向上のため，要望アンケートや留学生別科教員・学生部との情報交換交流会の実施を考えている。また交流活動として，プチカルチャー講座や留学生フォトコンテストの実施なども計画している。まだ未定であるが，より意義のある活動を行えるようにしていきたい。

6．留学生センターの意義と役割

留学生の本学での最終目的はいうまでも無く，学業を修め，卒業して次の進路に向かうことである。よって留学生センターの重要な役割は，日々の留学生との顔合わせや話にある。しかし，上記活動報告のような学内外での広く深い交流活動も，当然のごとく大きな意義がある。留学生

にとって日本人と友人になることは，何にも増して大きな喜びであり，また地域の方々に留学生と触れ合っていただけることは，留学生の支えともなる。地域に貢献できる大学の存在意義が大きく問われている昨今であるが，留学生の地域国際交流がその一端を担えるよう，センターとしても取り組んでいきたい。

センターの活動を総括すると，大きく分けて次の４つの活動を実施している。

① 学習援助

② 相談や心のケア

③ 学内交流

④ 地域交流

ただし，これらは総合的なもので，独立した活動ではない。地域交流が日本文化や日本語能力の向上につながるし，学内交流で，寂しい心が癒され，心のケアが行えるように，相互に絡み合って，留学生センターとしての役割を果たすことが出来ている。

以下，簡単に４つの活動の特長的な内容と意義を紹介する。

① 学習援助

・学内と岐阜県の弁論大会に参加

学内の第１回弁論大会には７名が発表し，それに向けて，作文・スピーチの練習を繰り返した。岐阜県の弁論大会にも，多くの応募がある中で，4名の応募者全員が予選通過を果たし，練習を繰り返して発表に臨み，会場から高い評価を得た。収録したビデオは，他学生の目標として今後の学習材料にも使用することができる。

・日々の学習の場

学生は授業の空き時間･放課後に自主的に学習をし，授業の質問などを教員にしている。また教員が呼び出して，定例・臨時の補習も実施する。試験対策の教材を提供したり，願書一括購入や勉強のアドバイスなどを行い，学習支援を行っている。

② 心のケア

・ふれあいミーティング

留学生が16名参加し，紙に本学の良いところ・もう少しのところを書き，意見交換を行った。学生からは良い点として，先生が熱心でやさしく，いつでも先生とふれあい安心できること，交流活動が多く学生生活が充実していること，教育設備がよく２級の国家資格が取得できることなどが挙げられた。もう少しの点としては，交通の不便さとバイトの少なさという学内では解決しにくい問題と，寮の様々な問題，専門用語のカタカナと漢字の難しさという，まだ解決の余地を残した問題点が指摘された。寮の問題では留学生側の問題もあると自覚していることは感心できる点であった。

このような問題はすぐに解決できないにしろ，学生が発言し，学校が理解し，解決しようとしている姿勢を知ってもらうだけでも学生たちにとっては少し納得がいくものと思われる。

・日常交流

留学生は相談があれば，担任に相談したり，留学生センターを訪れ，寂しい気持になったときもセンターを訪れてくれるようである。定例会議で報告された学生にはそれとなく話しかけたりして，心のケアを行っている。

③ 学内交流

・スポーツ交流

国家資格をめざす短期大学であるため，時間割上多くの学生が集まれる時間が無く，日常の交流活動は難しいが，クラスでは，休憩時間に話したりして，人柄がよく熱心な留学生には自然と回りに日本人学生が集まり，友人関係が出来ている。しかし，性格上交流が難しい学生や外国人を苦手とする学生もいるため，やはり積極的な交流の機会を作ることは大事なことである。やはり，一番交流が深まるのは，まずは言葉を介さないスポーツ大会などであり，好きなことを共に行う中で，自然と関係が深まる。この活動で留学生が部活動に参加したり，友達になったりする機会となっている。

・新入生歓迎会

これは，教員との交流が中心になるが，留学生の先輩や日本人学生も参加し，本学に打ち解ける第一の楽しい機会となる。

他にも学生同士がともに大学祭に参加したり，課外活動に参加するなどして友人関係ができている。ささいな事から，外国人だからと卑下したり，疎外感を持つのが異国で起きやすい感情であるが，それをかなり少なくすることができている。

④ 坂祝町・富加町・美濃加茂市・犬山市との交流

本学の位置する坂祝町を初め，周辺地域との交流はずっと続けられている。伝統行事への参加・小中学校との交流等は，日本への理解を深める上でも非常に有意義であり，特にホームステイは最高の機会である。ホストファミリーも留学生に優しく接する子供の姿に成長を感じたり，夫の「我が子が外国で冷たくされたらどう思う！」と温かく迎える姿に感動したり，家族の絆を深めることに留学生が貢献していることはうれしい発見であった。今後さらに機会が増えることを願っている。また異国では支えられることの多い留学生であり，言葉も不充分で自信をなくしがちであるが，今後は，地域の人々に役立つ活動をもしていきたい。それは留学生や本学が評価され，何より留学生の自信と意欲を促進することができる。それぞれの特技や，母国語の教授，母国料理の紹介等様々な交流活動が考えられる。小学校・中学校等での講演もできるであろう。留学生センターとしても地域の国際交流に貢献する大学としての役割の一端を担っていきたい。

以上のとおり留学生センターは目的に向けて活動を充実させ，ドロップアウトを防ぎ，留学生の心のケアを行っている。“いやしの場”としての機能を果たし成果をあげている。不充分な点は多々あるが，確実に留学生にとって必要な場所として根付いていると考えられる。

また日本人学生の利用者が増えており，留学生が本学に打ち解けてきていることは交流活動の成果でもあり，嬉しい限りである。

今後も更なるご指導・ご協力を受けつつ，留学生センターを発展させていきたい。これまでの学内・地域の方々のご協力・ご支援に心より感謝の意を表します。

最後にセンター利用者数を示すと次のとおりである。

2009年度：600名　（16名）

2010年度：１月末で900名（110名）１年間で約1000名になる見込み

（　）内は日本人利用者数

参　考　文　献

1）高瀬利恵子，古川竜治，福井　稔，鈴木敦巳，及川浩和：留学生別科における教育の意義と課題，中日本自動車短期大学論叢，第37号，p83-95（2007）.